本物以上の海をつくる

ー借景と結界、建築物としての水族館を考える。

★ 沖縄美ら海水族館

「世界一と世界初がここにある」ーその大きさゆえに飼育が困難とされたジンベイザメの複数飼育や、世界一の大きさを誇る大水槽、80 種 600 株に及ぶサンゴの大規模飼育など、見所がいっぱいの水族館である。

海洋博公園の 1 施設なので、時間があれば周辺施設にも足を延ばしたい。

〈底のない世界〉

海水魚を飼育するに当たって最も難しいことは何だろう？実際に飼育したことのある人なら次のことに思い当たるにちがいない。海水魚には、淡水魚にある習性が 2 つ欠けているのである。

1 つは鼻上げ。水槽の中が酸欠になると、金魚なら水面でパクパクと新鮮な空気を吸おうとするが、海水魚にはそれがない。波と潮の流れがある海では大量の酸素が水に溶け込み、そもそも酸欠という状態がないからだ。

もう 1 つは下に落ちたエサを拾わないこと。海水魚の多くは底に沈んだエサを食べない。目や鼻が利かないわけではない。「底」があるのは岸に近い浅瀬やサンゴ礁の所だけで、外洋にはそもそも「底」というものがないからだ。

外洋を泳ぐ魚（「黒潮の海」の水槽にいるような魚）は、海の中でも表層のわずか 5%の中に棲んでいる。それもごく表層の薄明かりの中に棲み、その下に広がる深海の深い暗闇の上をすべるように泳ぎながら生活している。(→P.39 参照)

そこではすべてのものが上から下へと沈んで行き、闇の中に吸い込まれるようにして視界から消えていく。そして、目の前を通り過ぎて落ちて行ったものは、もう 2 度と上がってくることはない。だから、マグロやカツオには下を見るという習性がない。

また、彼らはエラが弱いため常に口を開け、泳ぎ続けて新鮮な海水を口に入れないと死んでしまう宿命にある。生まれて初めて泳ぎ出したときから、死ぬ瞬間まで泳ぎを止めることができない。

酸素の供給と適切な量のエサやり。この 2 つは魚類飼育の基本だが、海水魚の水族館では特に重要な意味を持っているのである。

美ら海水族館では「黒潮探検」と銘打って、普段は入れない大水槽を上から見学するツアーも実施している。時間が合えば参加してもよいので、興味のある人は自分で調べてみるといいだろう。

〈借景と結界〉

よく考えて造られた水族館は心の奥底に響く。見る者を本当に海に潜っているような気分にさせる錯覚をいかにしてつくり出すか。そこには日本的な建築の美意識が見え隠れしている。

例えば美ら海水族館は 4 階建てである。4 階から建物に入り、順に階を下りるように見学し、1 階に抜ける造りになっている。なぜ 1 階から見学するようにしないのだろう？

理由は、海に「潜る」感覚が得られないから。

エントランスに立つと遠くに真っ青な海が見える。明るいガラス張りのゲートをくぐり、建物の中に入ることで、今見た海へ潜っていくような感じを無意識の中に植えつけることができるのだ。また入口を少し離れた所につくり、真っ直ぐ入れなくすることで、「ここから先は別の世界ですよ」という心理的な壁も作ることができる。世俗のことを忘れて海に沈んでもらうための、魚ばかりではない工夫がここに見て取れる。

こうした建築上の工夫はお寺や茶室の造りに通じるものがある。遠くの山や月を借りて庭をつくる技法や、茶室のにじり戸のように、入口を腰の高さまでしかない小さなものにして結界を張る技法は、日本では古くから洗練されてきた。そうした美意識が水族館という一見掛け離れたものに反映されている点が実に面白い。

それから「潜る」感覚を生み出すために、魚の配置や水面の高さにも絶妙な配慮がなされているのだが、すべてを明かしてしまっては興ざめであるから、こちらは実際に館内を歩きながら各自で考えてみるといいだろう。